初任期教員におけるポジティブ行動支援への意欲の変容過程

―就職前に PBS を学んだ教員 3 名の複線径路等至性アプローチによる検討―

Early-Career Teachers' Evolving Motivation for Positive Behavior Support

○稲垣　佑[1]，本木　信司[2]，尾上　智咲[3]

○Inagaki Yu[1], Motoki Shinji[2], Onoue Chisa[3]

([1]神戸市スクールカウンセラー・[2]兵庫県立阪神特別支援学校分教室・[3]武庫川女子大学大学院文学研究科)

([1]School Counselor in Kobe City / [2]Hanshin Special Needs School / [3]Mukogawa Women's Univ.)

Key words:ポジティブ行動支援，初任期教員，複線径路等至性アプローチ

目的

ポジティブ行動支援（Positive Behavior Support：以下、PBS）は、称賛などの肯定的な働きかけによって、児童の望ましい行動の形成と問題行動の予防を目指す支援の枠組みであり、本邦においても普及に向けた研修などの動きがみられる。一方で、研修内容の職場での活用には、受講者の意欲と職場環境が関わることが報告されている（Blume et al., 2010）。そこで本研究では、就職前に PBS を学んだ初任期教員が、着任後に PBS を学び実践しようとする意欲をどのように変化させたのかを、関わった出来事や周囲の働きかけとともに検討する。併せて、教育実践の中での PBS の位置づけの変化を考察する。

方法

大学 4 年次の 3 月に PBS 研修（3 回、計約 9 時間）を受講した 4 名のうち、歴史的構造化ご招待（HSI）に基づき、小学校教員 3 名（A～C、面接時 3 年目）を対象に、各 2 回の面接を行った。第 1 回は、実践チェックリストと、PBS を学びたい・実践したいという意欲のライフラインを手がかりに、出来事と意欲の変化を尋ね、第 2 回は TEM 図を本人に提示して確認・修正した。分析には複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いた。等至点を「今後も PBS を学び、実践したいという思いを持っている」とし、学びたい思いと実践したい思いは一体の意欲として扱った。研究協力者には研究の目的と任意参加、データの匿名化について説明し、同意を得た。

結果

3 名は異なる径路で意欲の上下を経て、等至点に至ったが、思いの持ち方は異なっていた。A の意欲は、1 年目に学級経営の困難から強い口調の指導に傾き減少したが、周囲の支援を得て余裕が生まれることで回復した。2 年目は児童とポジティブ行動マトリクスを作り、学校教育目標と結びつけて実践を続ける中で高まっていったが、年度末には自分のやり方が柔軟さを失っていたのではないかと振り返り、やや減少した。現在では、教育観を支える手立てとして今後も学びたいと語った。B の意欲は、1 年目には初任ゆえの多忙さで余裕を失って減少したが、夏休みに余裕ができ「叱り続ける先生にはなりたくない」と気づいて意欲が上向き、学びと実践を継続した。2 年目には、周囲には伝えることなく担任する学級にて授業の単元と PBS を結びつけた実践を行ったことで上向いていたが、秋からは負担増と学級のトラブルで下がり、「PBS だけでいいのか」と揺らいだ。現在では他のことも学ぶと決め、高まったと語った。C の意欲は、1 年目、特別支援学級での児童との関わりを通して上昇したが、夏休みを境に減少した。2 年目は通常学級で必要性を感じにくく、ほぼ横ばいだったが、現在では大人も含めた日常的な関わりに生かしていると語った。

考察

意欲の低下は、余裕や必要性という条件の変化と結びつけて語られ、意欲を支えた社会的ガイダンスは周囲の支援や児童との関わりなどであった。位置づけは 3 名とも、学んだ方法そのものとしての PBS から、自分の教育観や他の考え方との関係の中に置き直す方向へ変化していた。A は教育観を支える手立てへ、B は大切にしたい視点の一つへ、C は大人との関わりにも生きる見方へと捉え直した。A・B では、実践の課題や「PBS だけでいいのか」を問い直す経験が、位置づけを再考する契機となっていた。また、本邦では PBS の取り組みがまだ始まった段階にある中で、様々な懸念で職場では話題にしにくく、A・B は学校教育目標や授業の単元と結びつけて実践していた。以上から、PBS を学び実践しようとする意欲は、学んだ形のまま保たれるのではなく、自身の教育観や配属校の学校文化、教科指導の中に PBS を置き直しながら続いていたといえる。研修後には、学んだとおりの実践を求めるより、この置き直しを支えることが大切であり、そのために余裕をつくり、職場で PBS やそれに沿った実践が認められる環境を学校が整える必要がある。ただし、本研究は 3 名の回顧的な語りに基づくものであり、一般化には限界がある。

主な引用文献

Blume, B. D., Ford, J. K., Baldwin, T. T., & Huang, J. L. (2010). Transfer of training: A meta-analytic review. Journal of Management, 36(4), 1065–1105.